地質学雑誌　第112巻　第9号（通巻1332号）付録　昭和27年6月10日第三種郵便物認可　平成18年9月15日発行（毎月1回15日発行）

日本地質学会 *News*

Vol.9 No.9 September 2006

表紙写真：Cap de Creus半島（スペイン），褶曲帯の軸面片理

公示　日本地質学会2007年度代議員および役員選挙について
2006年度会員名簿作成アンケートにご協力下さい

2006年版会員名簿作成についてお願い

現状では名簿発行ができないかもしれません
名簿アンケートをご提出下さい！

個人情報保護法施行に基づき会員名簿を作成しておりますが，前回名簿に記載されている項目に，今回からは本人確認が必要となります．本人からの名簿掲載アンケートの回答がない場合は名前・所属以外の情報が掲載されなくなります．6月よりニュース誌・HPで広報しておりますが，現在のところ約4,700名の会員のうち，200名弱の方からしかアンケートのご回答をいただいておりません．このままでは，会員名簿はほとんど白抜きの状態でしか発行できません．場合によっては発行できかねる状況です．運営財政部会といたしましては会員サービスの一環として名簿発行に努力しておりますが，会員皆様方のご協力がない限り作業が進みません．アンケート未提出の方は，本誌掲載の書式ご利用の上，ご回答をお願いいたします．

会員全員の回答をお願いします．

□ この部分は記載されません　　■ 最低限記載される部分です

※印の項目は掲載必須項目です．掲載承諾の項目には□に✓を入れて下さい．

会員番号	（２００６年　月　日届） 名簿掲載アンケート：会員名簿訂正・変更カード				
ローマ字表記		生年月日			
※ 氏　名		専門			
□ 出 身 校	学校			□	年卒・在学
	大学	学部		□	年卒・在学
	大学	□ 修士課程			年修・在学
	大学	□ 博士課程			年修・在学
	大学	研究生・聴講生・その他（　　）			
※ 所　属					
□ 所属先部課名					
□ 所属先住所	〒　□（TEL　－　－　．FAX　－　－　） 代表・ダイヤルイン				
□ 自宅住所	〒　□（TEL　－　－　．FAX　－　－　） 代表・ダイヤルイン				
☑ E-mail Address	自宅・所属先のどちらかを登録してください．				

郵便物の受け取り先（いずれかに○）　　自宅　・　所属先

2006年9月　運営財政部会

掲載可の方は□欄にチェックを入れて下さい

日本地質学会*News*

Vol.9 No.9　September 2006

The Geological Society of Japan *News*
日本地質学会/〒101－0032　東京都千代田区岩本町２－８－15
井桁ビル　６Ｆ
編集委員長　大友幸子
TEL　03－5823－1150　FAX　03－5823－1156
main@geosociety.jp（庶務一般）
journal@geosociety.jp（編集）
http://www.geosociety.jp

Contents

公示　日本地質学会2007年度代議員および役員選挙について ……2
2007年度代議員選挙実施要領/改選となる役員および代議員名簿/継続任期（2008年総会まで）の役員および代議員名簿/代議員立候補届け

日本地質学会会員名簿作成アンケートの実施について ……5
「名簿掲載アンケート：会員名簿訂正・変更カード」記載について/名簿掲載アンケート

案内 ……7
第52回日本水環境学会セミナー/地質調査総合センター第６回シンポジウム「地質情報の社会貢献を考える」

公募 ……7
熊本大学大学院自然科学研究科理学専攻地球環境科学講座教員募集

日本地質学会情報ネットワーク強化部員を募集します ……7

紹介 ……8
宇宙から見た地質－日本と世界－　加藤碩一ほか（編）（中川　充）/ヤマケイ情報箱「日本の滝」①東日本661滝　②西日本767滝　北中康文著（加藤碩一）

丸山茂徳教授　紫綬褒章を受章（小宮　剛）……9

学協会・研究会報告 ……10
第17回国際堆積学会議（ISC2006）成功裏に終了（公文富士夫）/第５回ピークオイル，ガス研究協会（ASPO）ワークショップ参加報告（根岸敏雄）

Island Arc　日本語要旨 ……12
Vol.15　Issue 3 特集：Dynamic sedimentation in forearc basins: Results from the Choshi and Sagara drilling projects　ほか

ジオロジストのための法律メモ ……14
著作権譲渡等同意書の解説（18）

TOPIC ……15
活断層データベース大幅改訂（伏島祐一郎）

CALENDER ……15

委員会だより　行事委員会報告 ……16

院生コーナー ……16
The Second International Palaeontological Congress 参加報告（浦本豪一郎）

2007年度（2007.4～2008.3）院生割引会費受付開始 ……18

会費自動振替依頼書

表紙紹介

Cap de Creus半島（スペイン），褶曲帯の軸面片理

写真・文　**大友幸子**（山形大学地域教育文化学部）

Cap de Creus半島はピレネー最東端に位置し，変成した古生界とそれに貫入するバリスカン花崗岩類が分布する．半島中央部がNW－SE方向の褶曲帯で，南部と北部に剪断帯が発達する．写真は，低度変成作用を被った砂泥互層の褶曲とその軸面片理．この軸面片理は変成作用ピーク後に形成したものである．

参考文献：J.Carreras, 2001, *Jour.. Struct. Geol.*, **23**, 1457-1486.

広告取扱：株式会社廣業社
〒104－0061 東京都中央区銀座8－2－9　電話 03－3571－0997　　印刷・製本：日本印刷株式会社

公示

日本地質学会2007年度
代議員および役員選挙について

日本地質学会会則ならびに運営細則・選挙細則に基づいて，代議員および役員選挙を実施いたします．選挙細則および選挙内規を掲載するとともに，今回の選挙の要点を以下に記します．

＜代議員選挙＞

1．今回選挙するのは，代議員100名（全国区50名・地方区50名）です．選挙権および被選挙権は日本地質学会正会員にあります．今回改選される代議員は，前々回の選挙で選出された代議員です．

2．役員の任期はいずれも２年で，2007年４月（総会）から2009年３月（総会）までです．

3．代議員は，最高議決機関である総会に出席し，議決権を行使できます．また，理事に立候補することができます．

＜理事選挙＞

4．理事は，代議員の互選により選出されます．今回当選された代議員（全国区・地方区）の中から立候補していただき，７名を選出します．ただし，理事は代議員を兼務できません．

＜評議員選挙＞

5．評議員は，全国区の代議員に当選された方の中から選出されます．全国区の代議員当選者（理事当選者を除く）から代議員選挙の得票順および所属別定員充足数と支部所属者を考慮して，20名を選出します．評議員は，代議員を兼務します．

具体的な選挙については下記のとおり実施いたします．立候補ならびに推薦される方はお間違いのないよう，期日までに立候補届けをご提出下さい．

2006年９月10日
日本地質学会選挙管理委員会
委員長　関　陽児
委　員　加藤　潔・澤田臣啓
高橋路輝・西村瑞恵

2007年度代議員選挙実施要領

1．選挙者および被選挙者，立候補の届出について
選挙者および被選挙者は日本地質学会正会員に限ります．立候補届けは所定の書式（別途掲載）により期日までに届くよう，日本地質学会選挙管理委員会（〒101-0032　東京都千代田区岩本町2-8-15　井桁ビル）に郵送，または持参してください．

2．選出数および任期
代議員　100名（全国区50名，地方区50名）
1）当選者の決定は，代議員地方区は得票順，全国区は得票順とともに所属別枠による最低充足数が考慮されます．
2）全国区，地方区いずれの代議員当選者も理事に立候補できます．
3）全国区で当選した代議員のうち理事にならない代議員は，評議員に選出される可能性があります．
任　期　上記いずれも２年（2007年４月～2009年３月（総会～総会まで）

3．立候補について
代議員　自薦および他薦による立候補．

4．地方区の区分けは現在ある支部の区分に準じます．地方区で立候補する方は，居住する県別により該当する地方区で立候補してください．ただし，選挙者は所属支部に関わりなく，全ての地方区に投票できます．

5．地方区選出数は2006年８月の支部会員数により50名を比例配分しています．

北海道地方区	３名	（北海道）
東北地方区	３名	（青森，秋田，岩手，山形，宮城，福島）
関東地方区	19名	（茨城，栃木，群馬，埼玉，千葉，東京，神奈川）
中部地方区	９名	（新潟，長野，山梨，静岡，富山，石川，福井，岐阜，愛知）
近畿地方区	６名	（滋賀，奈良，京都，三重，大阪，和歌山，兵庫）
四国地方区	２名	（徳島，香川，高知，愛媛）
西日本地方区	８名	（岡山，広島，鳥取，島根，山口，福岡，佐賀，熊本，長崎，大分，宮崎，鹿児島，沖縄）

6．選挙日程
立候補受付期間
10月１日～10月31日（郵送，持参いずれも必着厳守）
選挙広報・投票用紙の発送　11月10日前後に郵送
投票期間　11月15日～12月15日
開票日時　12月18日，９時より学会事務所にて．
選挙結果（中間）報告　開票後速やかに，ホームページ，ニュース誌上にて報告
理事および評議員の選出　１月初旬開始～１月30日までに決定，報告

7．立候補の状況および選挙結果については，ホームページで随時お知らせいたします．

A．改選となる役員および代議員名簿

理　事　天野一男・上砂正一・大友幸子・高橋正樹・増田富士雄・宮下純夫・渡部芳夫

評議員（代議員兼任）

田崎和江・新妻信明・保柳康一・安間　恵・脇田浩二・磯﨑行雄・巽　好幸・楡井　久・三宅康幸・柴正博・板谷徹丸・永広昌之・荒戸裕之・山路　敦・横山俊治・矢島道子・国安　稔・田近　淳・阿部国広・納谷友規

代議員

＜全国区＞　秋葉文雄・荒井章司・伊藤　慎・卜部厚志・川端清司・川幡穂高・北里　洋・木村純一・清川昌一・小林哲夫・斎藤　眞・坂井　卓・高木秀雄・竹内章・竹内　誠・土谷信高・中川光弘・七山　太・藤林紀枝・星　博幸・堀　利栄・松本俊幸・松本　良・宮下由香里

＜地方区＞　芦　寿一郎・荒井晃作・安藤　伸・池上直樹・植村和彦・大木公彦・緒方信一・奥野　充・小澤一仁・笠間友博・鎌田耕太郎・川田祐介・川村寿郎・沓掛俊夫・栗田裕司・小井土由光・此松昌彦・坂口有人・清水正之・周藤賢治・鈴木和博・鈴木清一・高橋直樹・田上高広・塚原弘昭・寺林　優・都郷義寛・利光誠一・中川登美雄・西園幸久・橋本修一・林田明・原山　智・府川宗雄・外田智千・前川寛和・前田仁一郎・升本眞二・町山栄章・松居誠一郎・三田村宗樹・三宅　誠・宮田雄一郎・村田明広・森田澄人・森田宜史・山崎博史・山本高司

B．継続任期（2008年総会まで）の役員および代議員名簿

会　長　木村　　学

副会長　伊藤谷生・佃　栄吉

監　事　佐藤尚弘

理　事　Wallis Simon・狩野謙一・公文富士夫・倉本真一・中山俊雄・久田健一郎・向山　栄

評議員（代議員兼任）

会田信行・浅野俊雄・足立勝治・安藤寿男・石垣忍・石渡　明・井内美郎・井龍康文・岡　孝雄・小山内康人・加藤　進・紺谷吉弘・酒井治孝・徐　垣・新井田清信・針金由美子・松岡　篤・松田博貴・丸山茂徳・渡辺真人

代議員

＜全国区＞　佐々木和彦・吉川敏之・片山　肇・芝川明義・天野敦子・小嶋　智・鳥海光弘・吉川周作・榊原正幸・多田隆治・近藤康生・徳山英一・大藤　茂・豊島剛志・八尾　昭・仲谷英夫・早坂康隆・竹下　徹・三次徳二・岡田　誠・西　弘嗣・村山雅史・長谷部徳子・亀井淳志・山口飛鳥・奥澤康一

＜地方区＞　青野道夫・池田保夫・稲場土誌典・入月俊明・上野勝美・浦辺徹郎・大谷具幸・大和田正明・奥平敬元・小畑正明・加々島慎一・神谷英利・川野良信・川村信人・木村克己・楠田　隆・國井絢子・齊藤靖二・佐野　栄・島本昌憲・下山正一・菖蒲幸男・清水惠助・鈴木宇耕・鈴木紀毅・平　朝彦・田中秀実・竹之内耕・中条武司・永田秀尚・角替敏昭・手塚裕樹・中井睦美・奈良正和・延原尊美・長谷川卓・平島崇男・藤縄明彦・松末和之・松田義章・松原典孝・宮本隆実・森田康裕・山田泰広・山本博文・吉田孝紀・吉岡　正

◎　どちらの書式も紙はＡ４判（タテ）の大きさでご提出下さい．記入枠は適宜広げてください．

代議員立候補届け

＊印の項目は必ず記入してください．†印は他薦の場合のみ記入してください．

＊立候補の区分（地方区の場合はいずれかを○で囲む）	全国区 地方区（北海道　東北　関東　中部　近畿　四国　西日本）
＊立候補者氏名	E-mail Address
†他薦の場合：推薦者氏名	
†他薦の場合：推薦承諾書	日本地質学会（ 代議員 ）に立候補することを承諾いたします． （氏名　　）㊞
＊所属機関名（ない場合はなしとしてください）	
＊居住地の県名	
＊所属別区分（いずれかを○で囲む）	大学　小中高　官公庁　会社　大学院　とくに区分なし
所属専門部会	
立候補者の抱負または推薦文（100字以内）．推薦文の場合は推薦人名を文章の最後につけてください．	

選挙管理委員会受取日　　10月　　日

日本地質学会選挙細則

（目的）

第１条　日本地質学会会則第48条にもとづいて本細則を定める．

（規則の変更）

第２条　この規則の変更は，評議員会に諮り，理事会の議決によって行う．その結果を総会に報告し，承認を求める．

（選挙管理委員会）

第３条　役員（会長，副会長，理事および監事），代議員および評議員の選出作業は，選挙管理委員会が行う．

２　選挙管理委員会規定は別途定める．

（役員，代議員および評議員選挙）

第４条　理事（除く会長および副会長）および代議員は毎年，定数の半数を改選する．

２　会長・副会長，監事（１名，もう１名は会長が専門家を委嘱する）の選挙は正会員による無記名投票とし，選挙管理委員会は結果を理事会に報告しなければならない．

３　会長・副会長及び監事候補者は正会員とし，正会員２名以上の連署による推薦を受け，別途定める参考事項（必要事項と立候補にあたっての意見等）を記した立候補届けを所定の期日までに選挙管理委員会に届けなければならない．

４　代議員選挙は正会員による無記名投票とし，毎年定数の半数（全国区50名および地方区（区分は支部に準ずる）50名）を選出する．選挙管理委員会は結果を総会に報告しなければならない．なお，全国区の選出にあたっては所属別定員充足数を考慮する．

５　代議員候補者は正会員とし，自薦および他薦（本人の承諾書必要）とする．立候補者は別途定める参考事項を記した立候補届けを，所定の期日までに選挙管理委員会に届けなければならない．

６　理事（除く会長および副会長）の選挙は，全代議員による無記名投票とし，毎年定数の半数を選出する．被選挙者はその年度に選出された代議員とし，候補者は意見等の参考事項を記した文書を，所定の期日までに選挙管理委員会に届けなければならない．理事に選出された者は代議員から除くものとする．

７　評議員は毎年，定数の半数を選出する．評議員の選出は全国区代議員の選挙結果にもとづいて20名を決定する．決定にあたっては所属別定員充足数を考慮する．

８　評議員選挙の当選者の決定の際には，それぞれの支部所属者が最低１名含まれるように，選出順位の調整を行うこととする．

９　立候補者数が定数に満たない場合には，無投票当選とする．ただし，代議員選挙において全国区で立候補者数が定数を越えない場合には評議員選出のための投票をおこなうものとする．

10　投票方法，当選者の決定等については別途定める．

11　役員，代議員および評議員が任期中に何らかの理由で欠員となった際の補充方法は，以下のように取り扱う．

会　長　副会長の年長者が代行する．
副会長　理事の年長者が代行する．
監　事　会長が委嘱する．
理　事　理事選挙の補欠者をもって充てる．
代議員　会長が評議員会に委嘱する．
評議員　補充は行わない．

12　全国区代議員の選出および評議員決定の際の最低所属別定員充足数

所属	備　　考	最低充足数	
		全国区代議員	評議員
大学		6	3
小中高	教育センター等を含む	6	3
官公庁等	公団，行政法人，公立私立博物館等を含む	6	3
会社		6	3
大学院	大学院生	2	1

（選挙日程）

第５条　会長・副会長及び監事,代議員の選挙は次の日程で行わなければならない．ただし，締切り日が休日と重なる場合は，翌日あるいは翌々日とする．

(1) 選挙公示：毎年９月10日
(2) 立候補受付：毎年10月１日～10月31日
(3) 投票期間：毎年11月15日～12月15日
(4) 開票ならびに選挙結果報告：毎年12月16日～12月22日

２　理事の選挙および評議員の選出は，代議員選挙終了後，毎年１月30日までに完了することとする．

（細則施行）

第６条　この選挙細則は，2003年９月19日から施行する．

（付則）2003年12月13日改正

日本地質学会選挙内規

（選挙の実施）

１　選挙管理委員会において実施する選挙は，原則として郵便による通信投票とする．なお，この方法によらない場合には，あらかじめそのことを広報し，有権者に周知する．

２　立候補者は所定の立候補届けを，定められた期間内に選挙管理委員会に届ける．

３　選挙管理委員会は選挙を実施するにあたり，投票の参考となるよう，「候補者名簿」を作成し，投票用紙とともに有権者に配布する．また，開票日もあらかじめ知らせる．

４　「立候補者届」および「候補者名簿」には，立候補する役職に応じて定めた下記の事項を記載する．アンダーラインの項目は必須記載事項とし（所属機関がない場合は「なし」），それ以外は自由記載項目とする．

１）会長・副会長　　立候補者氏名，所属機関，推薦者氏名（正会員２名以上），候補者推薦承諾書，所属専門部会，立候補者の抱負または推薦文（100文字以内）

２）監事　　立候補者氏名，所属機関，推薦者氏名（正会員２名以上），候補者推薦承諾書，所属専門部会，立候補者の抱負または推薦文（100文字以内）

３）代議員　　立候補者氏名，所属機関，所属機関の所在都道府県名，（「所属機関なし」の方は自宅住所の都道府県名），立候補の区分（全国区・地方区）・所属別区分（選挙細則第４条12項に定めたもの），所属専門部会，立候補者の抱負または推薦文（推薦者名）（100文字以内）

４）理事　氏名，所属機関，立候補者の抱負または推薦文（推薦者名）（100文字以内）

５　正会員は，あらかじめ選挙管理委員会に申し出て開票に立ち会うことができる．

（当選者の決定）

６　各選挙とも選挙細則に基づいて得票順位を確認し，当選者を決定する．

７　当選最下位者が複数（同点）の場合は，抽選により当選者を決定する．抽選は選挙管理委員長の責任により，選挙管理委員が候補者の代理となって，候補者名簿の順にくじびきをおこなう．

８　理事選挙の当選者決定に際しては，当選最下位者に続く補欠５名を得票順に決定する．

９　選挙管理委員会は，開票結果を速やかに理事会等に報告するとともに候補者に通知する．また，学会ホームページやNews誌に速やかに掲載し，会員にも報告する．

（その他）

10　代議員の定数と補充について

代議員全国区の定数50名から理事７名を選出した場合の欠員は，補充の対象とはしない．

また，この理由以外で欠員が生じた場合でも，会則に定めた最低定数170名（１期85名）を割らない場合は補充しない．

11　代議員地方区の定数と補充について

１）各地方区の定数は，選挙公示１ヶ月前の各支部の正会員数に応じて比例配分する．

２）地方区が定数不足でも，全国区と合わせて会則に定めた最低定数170名（１期85名）に達している場合は補充しない．

12　本内規の変更は，理事会が決定する．

（内規施行）

2003年12月13日

日本地質学会会員名簿作成アンケートの実施について

日本地質学会では，学会員相互の交流と親睦を図る目的で，２年ごとに会員名簿を発行することを会則にうたっております．2006年はその発行年にあたり，本年12月末日発行の予定で準備を行いたいと思います．

名簿の発行様式は前回と同様で，全会員を収録します．本会としては，個人情報保護法の制約はあるとしても，会員の皆様が上記の目的に沿って利用できるような，従来規模の名簿を作成したいと考えておりますので，調査の実施にご理解とご協力をお願いいたします．

なお，会員名簿は評議員会でも議論されましたが，前回規模の名簿発行が望ましいとのご意見が多数でした．また，名簿作成時の会員以外は配布対象とはせず，会員も含めて発行後の販売は一切行わないことはこれまでどおりです．

アンケートの返送のない会員については，個人情報保護法の元で，名簿にお名前以外の情報を掲載することは難しい状況です．したがって，**アンケート返送数によっては，名簿の発行を取りやめることも検討しなければなりません**ので，会員の皆様におかれましては名簿発行の趣旨をご理解のうえ，アンケートにご回答下さるようお願いいたします．

名簿作成までの手続きを次のように行います．

１．「名簿掲載アンケート：会員名簿訂正・変更カード」を，全会員に提出していただきます．

掲載承諾のため，訂正，変更の有無に関わらず，会員氏名を記入して必ず返送して下さい．返送のない場合には承諾の有無が確認できず，お名前以外の情報は掲載できないことになります．カードの書き方の詳細は後段を参照して下さい．

２．提出締切日：2006年９月末日とします．

2006年６月

運営財政部会会員担当　中山俊雄

「名簿掲載アンケート：会員名簿訂正・変更カード」記載について

本カードは，全会員に提出していただきます．カードには，会員として登録されている（登録できる）基本項目を，すべて挙げてあります．各項目に修正や変更がありましたら，名簿掲載項目に関わらず，記入してお出しください．なお，会員名簿にはこれらの項目のうち，下記の名簿掲載項目(必須,選択)を載せます．選択項目については，個人の希望によりますので，必ず項目ごとに掲載の諾否をお示しください．

本用紙の裏面にFAX送信用のカードが印刷されておりますのでご利用ください．

１．名簿に掲載できる項目：※氏名（ふりがなつき），出身校，卒年，※所属先，所属部課名，所属先電話，FAX番号，連絡先住所＝自宅住所または所属先住所，自宅の場合は自宅の電話，FAX番号，メールアドレス（所属先または個人のどちらか一方）

２．名簿に必ず掲載する項目：上記の※印つき項目，氏名，所属（ない場合は掲載しない）

３．名簿掲載を選択できる項目：上記の※印のない項目すべて

４．選択項目の掲載承諾の場合：選択項目の□欄に✓を入れてください．✓印がない項目は掲載しません．

５．名簿に掲載されない項目：会員番号，生年月日，専門

６．掲載様式例

氏　名	出身校	卒業年	勤務先		〒	連絡先住所<e-mail>
地質（チシツ）　学（マナブ）	地質大（環境）	71	地質調査（株）地質部	T 03-5823-1150 F 03-5823-1156	101-0032	東京都千代田区岩本町2-8-15 <main@geososiety.jp>

＜名簿掲載アンケート＞

◎　誤記・変更・追加などありましたら，楷書ではっきりと，アパート・下宿等は忘れずに書いてください．
　団地名など省略できる場合は省略形でお願いいたします．会員番号は雑誌の宛名ラベル左下の7桁の数字です．
◎　名簿に必ず掲載する項目は※印つきの項目（氏名，所属〔ない場合は掲載しない〕）です．
◎　名簿掲載を選択できる項目は※印のない項目全部についてです．**掲載承諾をいただける場合には，選択項目の□欄にチェックを付けてください．**チェック印がない項目は今回の会員名簿には掲載しません．
◎　基本的に郵便物の受け取り先が名簿に掲載されている住所です．受け取り先を変更する場合は，欄外の受け取り先のいずれかに○をつけてください．
◎　地質学会のHPにも同様のフォーマットがありますので，それをご利用になって，E-mailで送信でも結構です．

日本地質学会事務局　御中

FAX：03－5823－1156
E-mail ： main@geosociety.jp

※印の項目は掲載必須項目です．掲載承諾の項目には□に✓を入れて下さい．

会員番号	（２００６年　　月　　日届） 名簿掲載アンケート：会員名簿訂正・変更カード				
ローマ字表記		生年月日	19　年　　月　　日		
※　氏　　名		専門			
□　出　身　校	学校	□	年卒・在学		
	大学　学部	□	年卒・在学		
	大学	□ 修士課程	年修・在学		
	大学	□ 博士課程	年修・在学		
	大学　研究生・聴講生・その他（　　）				
※　所　　属					
□　所属先部課名					
□　所属先住所	〒　□（TEL　－　－　．FAX　－　－　） 代表・ダイヤルイン				
□　自宅住所	〒　□（TEL　－　－　．FAX　－　－　） 代表・ダイヤルイン				
□　E-mail Address	自宅・所属先のどちらかを登録してください．				

郵便物の受け取り先（いずれかに○）　　自宅　・　所属先

ご案内

本会以外の学会および研究会・委員会よりの催し物のご案内を掲載します．

第52回日本水環境学会セミナー「湖沼水質保全対策の経緯と今後の展開」

主催：日本水環境学会
日程：**2006年11月２日（木）**
場所：品川区立総合区民会館「きゅりあん」７階イベントホール
参加費：会員/7000円．非会員/14000円．
　　学生会員/3000円
定員：150名
申込方法：FAX，E-mail，またはハガキに①参加者氏名（フリガナ），②会員・非会員の別，③会員の場合は会員番号，④連絡先（所属団体名，住所および電話・FAX番号）をご記入の上，下記宛てお申し込みください，また，**参加費を10月20日までにお振り込みください．**入金を確認後，参加証（ハガキ）をお送りいたします．
参加費振込先
　東京三菱銀行市ヶ谷支店（普通）0754950
　（社）日本水環境学会セミナー口
　シャ）ニホンミズカンキョウガッカイセミナーグチ
申し込み・問合せ先
　（社）日本水環境学会　セミナー係
　電話 03-3632-5351　Fax. 03-3632-5352
　E-mail：yamamoto@jswe.or.jp

地質調査総合センター第６回シンポジウム「地質情報の社会貢献を考える」

日程：**2006年11月14日（火）**13：30-17：00
　　（展示発表を含む）
場所：秋葉原コンベンションホール（秋葉原ダイビル２Ｆ）
主催：独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター・産学官連携推進部門，地質地盤情報協議会
共催：日本応用地質学会・（社）全国地質調査業協会連合会

地質情報の有効活用が，現在注目されています．建設コンサルタント，自治体，公的機関等が保有する地質情報を，知的基盤として整備し広く活用することができれば，地震防災や建設コスト削減等に大きく貢献できると考えられます．本シンポジウムでは，このような地質情報の社会貢献について講演や展示を中心に議論する予定です．
なお，講演後は，インターネットによる地質情報の公開についての近年進歩の著しい情報技術を利用した展示・実演を行う予定です．詳しくは次号をご覧ください．

公募

教官公募等の求人ニュース原稿につきましては，採用結果をお知らせいただけますようお願い致します．

熊本大学大学院自然科学研究科理学専攻地球環境科学講座教員募集

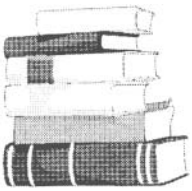
募集人員　教授１名
専攻講座　理学専攻・地球環境科学講座
専門分野　固体地球科学
担当科目　大学院および理学部（教養教育を含む）における地質学・岩石学・鉱物学・古生物学・地球化学・固体地球物理学など，地球科学の基礎と応用に関連した科目
応募資格
１．学位：博士あるいはPh.D.の学位を有すること．
２．年齢：50歳程度以下が望ましい．
３．実績・能力：研究に対して十分な能力と熱意があり，国際的あるいは社会的な教育研究活動を有すること．/専門分野において優れた研究業績を有すること．/大学院博士後期課程の指導が出来ること．/教育および教室運営など学内の業務遂行に意欲と能力を有すること．
採用予定日　採用決定後できるだけ早い時期
提出書類
１．履歴書（市販のもので可．写真を添付すること．）/２．研究歴および業績リスト（講座ホームページの記載事項例を参照）/３．主要論文（10編まで）の別刷りまたはコピー/４．教育に対する抱負（Ａ４用紙に2000字程度）/５．研究に対する抱負（Ａ４用紙に1000字程度）/６．所見を求めうる方２名の氏名，所属，連絡先，E-mail
応募締切　**平成18年10月31日（必着）**
　封筒に「地球環境科学講座教員（教授）応募書類」と朱書し，簡易書留にて郵送願います．
選考方法
第一次選考書類審査
　　平成18年11月上旬から中旬予定
第二次選考面接　平成18年11月下旬予定
書類送付先・問合せ先
　〒860-8555 熊本市黒髪2-39-1
　熊本大学大学院自然科学研究科理学専攻
　　地球環境科学講座主任 長谷川四郎
　　電話: 096-342-3421（直通）
　　e-mail: shiro@sci.kumamoto-u.ac.jp
　　http://www.sci.kumamoto-u.ac.jp/earthsci/

日本地質学会情報ネットワーク強化部員を募集します

日本地質学会理事会の情報特任理事のもとに活動する，情報ネットワーク強化部員（数名）を募集します．

背景：世界における情報流通は飛躍的に進行しており，この数年間で多くの学術雑誌の電子ジャーナル化が進んでいます．印刷体を持たない電子ジャーナルも次々と創設されており，地質学雑誌やIsland Arcも電子投稿や電子査読システムの導入が進められています．こうした情報革命の進行やヨーロッパを中心に進められているフリーアクセス運動（全ての学会情報をフリーにアクセス出来るようにするといった運動）は，従来の学会のあり方（同好の士による利益共同体的性格）をも実質的に変更を迫るもので，会員に閉じた利益共同体から「広く社会へ情報発信をする権利を有する」といったような性格へと変化する事を要請しています．
　このような背景のもと，地質学会理事会では情報特任理事をおく事，そのもとに情報ネットワーク強化部をおいて地質学会としての情報発信や学会内部での情報流通などの飛躍的改善を図る事としました．

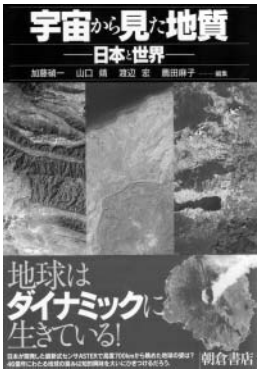
任務：情報特任理事のもと，情報流通に関する調査，解析，提言などを自由・闊達に行ってもらいます．報酬はありませんが，実際の作業に携わる必要があったり，企画が認められて実施するのに予算措置が必要な場合は措置することが可能です．取り扱う範囲は，学会ホームページの内容，会員相互の情報流通，広報，学術雑誌関連など，地質学会のあらゆる活動に関連した情報ネットワークの強化という事になります．
任期：当面，来年の地質学会学術大会までの１年とします．
活動形態：基本的にメール会議で行いますが，必要があれば連合学会や地質学会開催時に会合を持ちます．
応募期限：10月16日（月）とします．地質学会事務局＜main@geosociety.jp＞もしくは情報特任理事の宮下＜miyashit@geo.sc.niigata-u.ac.jp＞まで直接申し込んで下さい．



紹　介

宇宙から見た地質
－日本と世界－

加藤碩一・山口　靖・
渡辺　宏・薦田麻子（編）



〈朝倉書店　2006年６月発行
Ｂ５判150ページ　ISBN：4-254-16344-4
定価7,400円〉

飛行機から地上の風景を見ることはいつでも望むところだ．可能な限り翼の無い窓側の席に座りたい．特にプロペラ機のような比較的低空で飛行する場合の箱庭的な様子は見飽きることが無い．多くの人が飛行機に乗って上空からの風景を経験できるようになった今でも，宇宙からの景色となると，特殊な訓練を受け選ばれた人の世界である．それゆえ「地球は青かった」に始まる名言の数々が語り継がれるのであろう．

本書は日本が開発した人工衛星搭載のASTERセンサーによる高度700kmから捕らえた地表の姿を，地表をなめるように這いつくばって調査する地質屋らが複眼的視点で結んだオールカラーの好著である．複雑に入り組んだ地球表層の各種探査において衛星リモートセンシングの有効性を視覚的に訴える広告塔としての役割を果たしている．さらには，地球の営みの反映をアラベスクと評し，知的好奇心を刺激する「眺めて楽しい画像の提供」に成功している．

本書の構成は，最初に『ASTERについて』開発の背景や経緯を含め，その特徴や性能，データ種類や入手先などについて丁寧に解説される．ついで，本編とも言うべき23地域の画像について，以下の３テーマごとに分けられて，関連する（地質）図や写真とともに説明される．

『I　地球の熱き息吹を見る』
　富士山をはじめ６地域
『II　いにしえの地球史を探る』
　チベット高原をはじめ８地域
『III　地球の成長を追う』
　紅海とアカバ湾をはじめ９地域

各章には，例えば「21章　スレマン褶曲帯－地球の果実を秘めるパキスタンの皺」のように，直感的理解を助ける副題がキーワード的に添えられている．画像は，地域や植生，目的に応じて適当な処理が施され，ASTERの特技でもある立体視機能による鳥瞰図も分かりやすい．地質図や実際の景色の色に慣れた目でフォールスカラーや特殊処理を施された画像を見ると，初めて偏光顕微鏡のクロスニコルを入れたときのような動揺を覚える．とともに，解像度や処理によって”見れども見えず”状態に幻惑されていないかが常に気になるところでもある．

インターネットの検索で多くの情報にたどり着ける時代とはいえ，多くの文献やURLが記され，更なる探求への配慮はありがたい．取り上げられた23地域と同数に及ぶそれらの著者名は，”立ち読み”も含め以下の朝倉書店HPで見ることができる．
http://www.asakura.co.jp/books/isbn/4-254-16344-4/

さらに，『地質リモートセンシングのよりいっそうの理解のために』が30頁，『用語解説』が２頁巻末に置かれている．実物と画像をスムーズに結び付けるには，ある程度の基礎知識とスケール感の掌握が不可欠であり，これらを養うための入口を意図したと思われる．ただ、この部分は白黒の図表が多く，フルカラー・アート紙印刷を生かしきれていないのが少し残念ではある．

全体として初版につきものの誤植等が散見されるが，致命的ではない．国産旅客機YS-11が日本の空から退役する年に，国産センサーの画像集が出来された縁を感じる．いながらにして世界各地を衛星から眺め，かつその種明かしまで知ることができる本書（副題の－日本と世界－にしては国内２例でさびしいが・・）は，まえがきで編著者らがいうように眺めて楽しい画像の発見という「望外の喜び」を越え，特別な旅行ガイド「地球の眺め方」である．

（中川　充）

ヤマケイ情報箱「日本の滝」
①東日本661滝
②西日本767滝

北中康文著

〈山と渓谷社　①2004年９月発行，432p，
定価3800円＋税，ISBN：4-635-06257-0/
②2006年8月発行，496p，定価4200円+税，
ISBN：4-635-06258-9　ABスモール判〉

日本の滝２西日本767滝が刊行され，日本の滝の図鑑が完成した．

著者の写真家北中康文氏一人のファインダーで見た，日本の滝1428滝が２冊の本の中に凝縮されている．ページをめくると新緑の頃の写真が比較的多く，北中氏が萌え立つ新緑の力や流れ落ちる滝の躍動感に生きる力を感じているように私には感じられる．ページをめくるごとにすがすがしい清涼感を味わうことができ，熱い夏にはもってこいである．また，撮影条件（絞り，シャッター速度）を変えることによって，滝の様々な表情を切り取っていて，さすがプロの写真家の作品集である．フルカラーの写真が1428滝（写真の枚数としては滝の数より多いそうだ）あり，総ページは東日本，西日本合わせて900p以上，それでこの価格は，とても専門書ではまねのできない価格設定である．

この本をここで紹介したのには訳がある．東日本編では，多くの滝にその地質が示されている（各滝の地質の監修は西日本編の巻末を見ると中野　俊氏であろう）ほか，13の地質のコラムが産総研地質調査総合センターの研究者をはじめとする地質の専門家によって書かれている．このコラムには，５万分の１ないし20万分の１地質図幅を基にして作られた立体地質図がついている．これによって滝

がどんな地質・地形の場所にできているか一目瞭然である．このコラムの著者が火山の研究者が中心となっているのは，東日本編の滝の大半が第四紀火山の溶岩流のへりなどに形成されていることと対応している．

一方，西日本編では，東日本編とは地質の書き方が異なっている．産総研の斎藤　眞氏によってすべての滝の地質が判別されており，巻頭には滝を構成している主な地層について日本の地質全体から解説が加えられている．西日本編では，滝を構成している地層が，第四紀火山ばかりでなく，付加体の岩石，白亜紀－第三紀の火砕流堆積物なども多いことから，このようなスタイルの違いになったのではなかろうか．しかも，すべての滝の地質を文献から探し当てるのは並大抵のことではなかったろう．地質図幅を作ることを仕事にしてきたからこそ，できたものであるのかもしれない．

この写真集には，日本の滝100選のマークがしばしばでてくる．日光の華厳の滝（東日本編），静岡県の白糸の滝（東日本編），和歌山県の那智の滝（西日本編）などである．どれも観光地として有名である．また，地方を訪れたときに小さな滝にも展望所が設けられていたり，公園になっていたりするところにしばしば出会う．滝を落ちる水は，水量や光線によって様々な様相を見せ，滝壺に落ちていく音とあいまって，人間の心を揺さぶるためであろう．しかし，これらの滝を作った地層・岩石に目を向ける人たちがどれほどいようか．われわれ地質家にとっては，滝の形成に地質が関係しているのは自明のことである．しかし，一般人がそれを認識することはこれまでほとんどなかった．それに目を向けてもらうには，本書はかっこうの手引き書となる．地質とは全く縁の無かった人を対象にした地質の普及書としての観点で見ても，優れた本と言うことができる．

あえて地質の部分に改善点を望むなら，東日本はすべての滝の判読と，日本の地質全体の中での滝の地層のできたいきさつを，西日本編では地質のコラムをつけて，両編の統一をとると良かったであろう．

さて，近年，地質学の分野でもアウトリーチ活動が重要という認識が生まれ，さまざまの活動がなされている．産総研の地質情報展などもその一つである．地質学会でもユネスコ提案によるジオパーク設立のとりくみが進められようとしている．この２冊の写真集に掲載された滝の中には，まさにジオパークの候補になりそうなものが含まれている．このような写真集は，地質学会が推し進めているジオパークの普及の一つの形になるものといえる．地質家や登山家・沢登り愛好家だけでなく，広く一般に読まれる（眺められる）好著といえよう．

（加藤碩一）

丸山茂徳教授　紫綬褒章を受章

東京工業大学丸山茂徳教授が2006年４月29日，春の褒章発令において，スーパープルーム仮説の提唱と地球史の研究を評価され，学術，芸術上の発明，改良，創作に関し事績の著しい方を対象とする紫綬褒章を受章された．これは日本の地質学の歴史上，記念すべき重要かつ名誉なことと思われるので，ここに彼の業績について簡単に解説しておきたい．

私は，丸山さんが東大から1994年に東工大に異動された後，最初の東工大卒論生として丸山研に所属した．私の知る東工大教授としての丸山さんは，全地球史解読や全地球ダイナミクスといった一連の学際共同研究型の大型プロジェクトを企画・実践してみせた万能型の科学者である．しかし，その丸山さんも始めからそのような研究をされていたわけではない．

丸山さんは，四国中央部・黒瀬川構造帯の研究を，詳細な地域地質と岩石学を組み合わせて進め，博士論文を書き研究者としてのスタートを切った．その後も，日・米・中・カナダの変成帯の地質や岩石学の研究を行ってきた．その間，地球物理（瀬野徹三氏）や島弧火成活動（巽好幸氏）などの多くの異分野の研究者と交流を持ち，「ひとり学際研究」を行えるほどの見識を広げてきた．そのような学際研究と他分野進出への下地は，院生時代に既にあったようである．丸山さんは，名古屋大の院生時代に，地球物理（中西一郎氏や大野一郎氏），超高圧実験（大谷栄治氏）や変成岩岩石学（中嶋隆氏）などの同期生らと異分野学際セミナーを悪戦苦闘しながらも続けたそうである．このような他分野交流が，後（20年後）に異分野へ進出する際の勇気と免疫を作ったのであろう．最近は，惑星史や生命の出現・進化の研究のみならず，現在の環境問題について地球史レベルで考える研究や，人間・社会科学とこれらに対する地球科学の役割にまで研究対象を広げている．このような見識の広さが基礎となり，日本の地質学100年の間に培われた付加体地質学を太古代の地質体に適用してこれまで謎であった初期地球史を解読したり，地球表層の地質を地震波トモグラフィーの研究と比較してプルームテクトニクス仮説を構築し，さらには対象を火星史にまで拡張することができたのであろう．

さて，丸山さんの研究の真骨頂といえば，究極の地域地質であろう．地域地質というと，一般性のない雑多な研究といったレッテルを貼られがちであるが，それは大きな間違いである．地球科学のみならず地球や惑星の現象は全て複雑系の科学であり，現象を決める要素が多数あるために，どのような事象にも個性が生まれ，故に多様性が生じる．しかし，その現象の奥に潜む本質的な問題を決める主因を探るには，常に個性の研究から始まる．地質学では「地域地質」から始まるのである．丸山さんの研究スタイルは，特定の地質体について極めて詳細に地質調査を行い，数千から一万個の岩石試料を採取し，記載し，その中から，研究目的に適する試料を選定し，さらに多角的に分析・解析するという常識的なものである．特徴はそれを徹底することである．そのようにして，積み上げてきた研究から，全体的な調和のとれた研究や解釈が生まれ，総合的な理解につながる．このような総合科学は，最近の研究でよく見られる，ある一面（性質）のみを深く切り下げて結論を導く研究とは質的に大きく異なる．

丸山さんの研究が地域地質の枠組みを越えて一般性を持つものとなる最も重要な要素は，膨大かつ幅広い論文検索とコンパイルにある．丸山さんは世界中，さらには火星にまでおよぶ地質データをコンパイルし，その中から研究目的に最適な場所を選び，そこに集中投資をするという「標準岩体研究」を提案，実践している．そして，その選ばれた各時代・各造構場の地質体を同じ基準・手法で研究する事で，「全地球史46億年計画」研究を推進している．

地学教育・研究の地盤沈下が声高に叫ばれている中，丸山さんの紫綬褒章の受章は，日本の地質学が社会に広く認められ，科学の発展に大きく貢献してきたことを示す象徴的な出来事で，日本の地質学にとって名誉なことである．これは「付加体地質学」の原理の確立を華の一つとして日本の地質学が100年の間に積み上げてきた研究思考が，いよいよ世界に輸出される時代が来た事とも同期している．今後は，地学教育をもっと充実させ，その裾野を広げ有能な若手研究者を発掘するとともに，私たち若い世代が，日本発の研究をこれからもより多く世界に発信すべく努力邁進することが重要で，それがまず日本，さらに世界の地質学・地球惑星科学を更に発展させる事につながるであろう．

丸山さんの「一般研究者道」の今後の発展と更なる進化を期待して，丸山さんの紫綬褒章受章を心からお祝いいたします．

（小宮　剛）

写真：2006年夏，アパラチア変成帯にて，超高圧変成岩を探索中（大森聡一氏撮影）

学協会・研究会報告

第17回国際堆積学会議（ISC2006）成功裏に終了

公文富士夫（信州大学；第17回国際堆積学会議組織委員会副委員長）

ISC2006は福岡国際会議場を会場として，８月27日から９月１日まで，50カ国，800人以上の参加者を得て，大きく成功して終了した．参加者やその国別の数字は集計中であるが，中国や韓国の参加者が100名以上あり，ヨーロッパや北アメリカのみならず，近隣のアジアからの参加者も多かった．参加人数のみならず，企画や講演の質の高さもIAS執行部から高く評価された．

国際堆積学会議は国際堆積学協会（IAS）が主導して４年に１度開かれるもので，東アジアでの開催は今回が初めてであった．IAS，日本堆積学会，日本地質学会が共催し，多くの学協会の後援をえて開催された．野外見学は国内19コース，韓国２コース，台湾１コースで行われ，東アジアの堆積学者の協力を得て成功することができた．次回は2010年に南米，アルゼンチンのMendozaで開催されることが決まっている．

地質学会および会員諸氏のご協力に深く感謝いたします．

第５回ピークオイル，ガス研究協会（ASPO）ワークショップ参加報告

根岸敏雄（コスモ石油株式会社）

近年の石油価格の高騰，高止まりを受けて石油の生産限界（ピークオイル）の議論が多く出てきている．しかし40年前にも石油はあと40年と言われていたが（R/P，埋蔵量を生産量で割ってあと何年分あるかを見る簡便な指標），今でもまだ40年（BP統計）だから石油は生産ピークではないと言う楽観論も多い．ここで紹介するASPOのように，石油の生産ピークは近いのでそれに備える準備が大事であると警鐘を鳴らし続けているグループもある．

アメリカの石油技術者のハバート（1903-1989）は，米国の石炭，石油の生産挙動を州毎に詳細に検証して，いずれの生産挙動も同じ形の曲線（ベル型曲線）を示すのに気が付いた．この曲線は人口論などで用いられている"ロジスティック曲線"である．ハバートは米国48州の石油の生産挙動がこの曲線の前半部分に極めて似ていることに気づき，曲線モデルの最小二乗法計算から，当時地質的に検討された究極可採埋蔵量の最大公約数的な数字が2,250億バレルであったので，生産のピークは1967年から1973年の間になると予測した．実際に米国48州の石油生産は1971年をピークに減退を始め，ハバートの予測が的中した．ハバートモデルで表されるベル形曲線の面積は，究極埋蔵量そのものを表している．また生産のピークは全体のおよそ半分を生産した時である．このように前半の生産挙動が判れば全体の量（今後も発見される量を含む究極可採埋蔵量）と生産ピークが推定できると言うのがハバートモデルである．

このハバートモデルを基に世界の石油生産の頭打ち（需要が供給を上回る，いわゆるピークオイル）の到来に早くから警鐘を鳴らしていたのがASPOである．

ASPO（Association for the Study of Peak Oil & Gas）は，キャンベル博士によって2000年12月にドイツのクラスタル大学で設立された私的な科学者の研究ネットワークである．その後スエーデンのウプサラ大学のアルクレット教授に引き継がれ，現在の事務局はウプサラ大学にある．始めは主として欧州各国の科学者のネットワークから始まったが，現在はアメリカ，カナダ，オーストラリア，アジアの各国の科学者も参加しており，全体でおよそ20カ国の参加がある．目的は，１）世界の原油とガスの最新の埋蔵量評価，２）需要，経済状況，技術，政策などを総合的に加味した石油の生産減退モデルの作成，３）石油の減退と言う深刻な問題の一般への衆知のための啓蒙活動，等となっている．

活動の一環として毎年国際ワークショップを行っている．第１回を2002年ウプサラ，第２回2003年パリ，第３回2004年ベルリン，第４回2005年リスボン，そして第５回が今年イタリアのピサで７月17日から19日に開催された．ピサはガリレオに関係深い場所であり，ピサの斜塔でも有名である．今回ピサがASPO５の場所に選ばれたのは，“それでも地球は回っている”と言う有名なガリレオの言葉とか（それでも石油は生産ピークが近い），生産減退を斜塔に象徴させたのかは判らないが，偶然にしては出来すぎた場所というのは余りにも穿った見方かも知れない．今年は20カ国からおよそ150人の参加者があり，日本からも５人の参加者があった．注目されるのは報道関係者30人の参加で，ピークオイルの注目の高さを示していた．2007年のワークショップはアイルランドのダブリンでの開催が計画されている．

ピサの斜塔とハバートモデルのピークオイルをイラスト化したASPO５のロゴマーク．

今年のワークショップのテーマは“（ピークオイルの）問題とその解決”で，既にピークオイルが何時かの議論はASPOとしては峠を越えたようで，主題は如何に石油生産のピークによって起こるであろう混乱を回避して，ピーク後に備えるかに移ってきている．ワークショップの発表でも，ハバートモデルの解釈や変形に関する議論もあったが，多くの発表は，実際の生産状況から石油の生産減退が“現実”と言う現状認識を基に，如何に生産減退に対応するかに主題が移ってきている．

今年のワークショップでは組織委員長であるASPOイタリアのバルディ　フィレンツェ大学教授の開会の挨拶の後，ASPO創始者で名誉会長のキャンベル博士が“The Age of Oil in Perspective”と言う基調講演を行った．内容は，石油の発見のピークは40年前に来ており，生産のピークが来るのも必然の帰着である．ASPOの活動によりピークオイルという言葉も辞書に載るようになり，今後の生産減退に如何に対応するかの時に来ている．油価の高騰は需要の減退を招き，ひいては経済活動の減退に繋がり，国家の衰退を招きかねない．今こそ人々に石油依存の問題を認識させ，無駄を省き，効率を追及すること，再生可能エネルギーへの転換を啓蒙すること

が重要である，というものであった．

次いで会長のアレクレット教授が“A World Addicted to Oil: It is time to sober up”という発表を行った．まず世界の石油の生産，減退，需要の総括を行った．特に国際機関が発表している埋蔵量や生産予測は事実を反映してなく，現状の認識を誤った方向に導いている．これらによれば2030年までに需要に応えるために今より3,000万BDの増産が必要であるが，達成不可能な数値である．アメリカ地質調査所による世界の埋蔵量は3.3兆バレルであるが，この数値は過大で現時点での残存埋蔵量は1.5兆バレル（全体で約2.5兆バレル－著者注）が良いところである．生産量に関しても，サウディアラビアは1,050万バレル，ロシアは2007年頃，深海の石油生産も2010年頃がピーク，オイルサンドも，7百万BDでピークでとても在来型石油の減退を補填できない，等であった．

次いで23の研究発表が２日間に亘って行われた．ピークオイルの問題提起の基になったハバートモデルに関しては，講演，ポスターセッションで３つの発表があった．いずれもハバートモデルのカーブフィッティングの精度を上げる為に，どのようなファクターをどのように扱うかであるが，その一つに油田のフラクタル分布を前提に統計，確率論的に油田毎の生産量予測をしようというものがあった（B.Michel）．最近エムシーエクスプロレーションの井上正澄氏が石油技術協会誌に発表した“探鉱シミュレーター”と類似の志向ではないかと思われる（石技誌，Vol.71, no.3, pp280 - 292）．ピークオイル予測の重要な要素の一つの埋蔵量と未発見石油のポテンシャルを，従来の地質的なアプローチでない方法で求めようとする非常に興味ある論文である．

ピークオイルに関しては，既に2004年に来た（M.J.Salameh）から，2015－2020年（Pierre R.Bauquis）まで位の予測があったが，多くは2010年前後と見ているようである．ピーク年の予測に関しては，ハバートモデルに基づく検討よりは，より現実的な発見と消費のギャップ（１バレルの発見に対して６バレルの消費）とか，油田の顕著な生産減退（世界の主要120油田の50%が生産減退，シュランベルジャー社によれば平均の減退率は８%/年など）など事実に基づく評価が多かった．また石油の生産ピークに続き，天然ガスは2030年，石炭は2040 - 50年で化石エネルギー依存の限界の指摘もあった（J.M.Bourdaire）．2100年のエネルギー需要予測に関しては，原子力　60%，石油　30%，その他10%という予測が発表されたが（Pierre R.Bauquis），原子力に関してはウラニウム資源の限界，安全性などから問題が指摘された．代替エネルギーとしては自然エネルギーの重要性の指摘はあるが，現実的には開発が間に合うのかが問題と言うのが大方の理解のように感じられた．

石油価格に関しては，生産減退につれ当然上昇するが，高価格が需要を抑制して高値安定となる．高価格に慣れるとまた需要は増加するという段階的な繰り返しによって石油の価格は上昇するが（例えば2023年のピークでは$100バレル，Bauquis)），他のエネルギーとのバランスで何処かのレベルで安定する．新規油田の開発や代替エネルギーの開発に関しては，EROI（Energy Return On Investment）が指標となるが，新規油田に関しては急激に悪化していて，代替エネルギーのチャンスが出てきている（A.S.Hall）．GDPと石油の需要は整合関係にあるので，高価格による需要の減退はGDPの減退を招くが，＄90/バレルまではむしろ金利の方が経済への影響が大きいとの分析もあった（A.McKllop）．現在の高価格は一時的な需給のアンバランスによるものではないので，近い将来1973と1979年の石油危機以上の混乱を引き起こす前兆として注意すべきとの意見もあった（M.G.Salameh）．

ワークショップ会場風景．ピサ郊外の公園の仮設テントが会場

石油生産の減退による経済活動の後退や石油争奪戦争やテロリズムの危険を如何に未然に防ぐかが重要であり，京都議定書と同様な趣旨の“Oil Depletion Protocol”の必要性が発表された（R.Heinberg）．“Oil Depletion Protocol”は，キャンベル博士によって最初に2002年のASPOウプサラワークショップで発表された．内容は，１．油田の適正生産量の維持（過大生産は油田を傷める），２．石油需要の抑制，３．再生可能エネルギーの開発，４．農業への石油利用の脱却，５．輸送手段の石油利用の脱却，鉄道，自動車の共同利用など，６．ガソリン利用権の相互融通（権利の販売），７．排出規制，等石油の生産減退の状況で，如何に混乱なく石油代替エネルギーへの転換を図って行くかの方策を提言し，広く周知させることである．特に生産，消費に関しては，現状の“減退率”以上の生産を行わない，消費も減退率に合わせて削減すると言う提案で，石油需要の軟着陸を図る方策を提案している．

ポスターセッションでは14の発表があり，“Post Oil Strategy In Japan”のテーマで産業技術総合研究所国際部門の大久保泰邦博士，同技術情報部門の森本慎一郎博士が共同で日本の状況を発表していた．ここでは日本の石油依存の現状を説明し，脱石油の現状の一例として，富山のライトレールの紹介などをしていた．ポスターセッションでは，ワークショップの後ビールを片手にリラックスした雰囲気で活発な意見交換が行われていた．

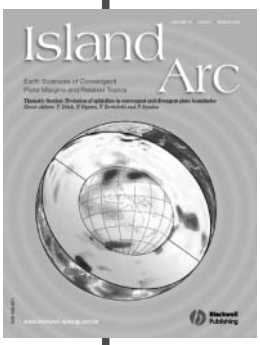
第１日の夜に夕食会があった．会議場近くの競馬場の屋外レストランが会場で，約100人余りの人が（中にはご夫妻で）参加していた．毎年の参加が恒例の人達も多いようで，和やかな雰囲気の中でキャンティーワインとイタリア料理を心行くまで堪能して，宴は活発な意見交換を含み夜遅くまで続いていた．

ASPOワークショップでは当然のことながらピークオイルの概念は広く受け入れられている．しかしながら一般にはピークオイルに懐疑的な人達，あるいはまだずっと先と楽観的な人達も多い．　最近の油価の高騰によるガソリン価格の顕著な値上がりは，日常生活を直撃して人々の石油問題への関心を高めている．ピークオイルは石油枯渇の危機を煽っているものではない．ハバートモデルによればピークオイル後でも，生産は減退するが石油の埋蔵量はまだ半分残っている．現在の消費量でも40年分くらいある．更に未発見，未開発油田の精力的な探鉱開発，非在来型石油開発など，この十分な時間の内に多くのやるべきことを含めて，石油時代の軟着陸を喚起しているのがピークオイル論である．またこの軟着陸の方策は，省石油，脱化石燃料など環境問題の解決と目指す方向は同一である部分もあるので，現在の大きな問題－エネルギーと環境問題－の解決の為に，バランスある対応により経済，社会生活の混乱を最少にする国際的な政治レベルでの解決策の構築が必要となっている．ASPOの活動も徐々にではあるが政治レベルでの認識が広まってきている．

参考資料

ASPO（ピークオイル，ガス研究協会，Association for the Study of Peak Oil & Gas）
www.peakoil.net/

ピークオイル，　ハバートモデル
本村真澄（2004）：ピークオイルは近づきつつあるか？　石油天然ガスレビュー，38（11），1-18
井上正澄（2005）：石油の資源量と寿命―フラクタル理論とダブルタンクモデルが明かす真の姿―ピークオイル論もチープオイル論も正しくない！　石油天然ガスレビュー，39（1），1－11
根岸敏雄（2006）：石油の生産量はピークに来たのか？　ピークオイルの本質と21世紀のエネルギー，石油文化社



Islands Arcは，年４回発行されます．最新号のVol. 15 Issue 3が2006年９月に発行されます．日本語要旨をニュース誌と学会ホームページ（http://www.geosociety.jp）にも掲載しています．全文はオンライン（http://www.blackwell-synergy.com）で無料閲覧できますので，是非ご覧下さい．

（Island Arc連絡調整委員会）

Vol. 15 Issue 3（September）日本語要旨

特集：Dynamic sedimentation in forearc basins: Results from the Choshi and Sagara drilling projects

北里　洋，和田秀樹，Kevin Pickering，平　朝彦

1. Origins of hydrocarbons in the Sagara oil field, Central Japan

Tomohiro Toki, Toshitaka Gamo and Urumu Tsunogai

相良油田における炭化水素ガスの起源

土岐知弘，蒲生俊敬，角皆　潤

2002年１～３月に実施された相良油田掘削計画（最大深度200.6 m）において静岡県相良油田（34°44'N，138°15'E）から孔内ガス及び地下水を採取した．相良油田から産出する相良原油は成因として微生物の関与が指摘されていた．本研究では，相良油田の掘削孔内ガスおよび地下水試料中の炭化水素ガスの濃度および炭素同位体比を測定し，相良油田内に分布する炭化水素ガスの成因について検討した．メタンの炭素同位体比及びメタン／エタン比から，相良油田における炭化水素ガスはすべての深度において有機物の熱分解起源の特徴を示した．各炭化水素ガス相互の炭素同位体比の傾向から，軽炭化水素ガスの重合反応が起きている可能性は小さい．

Key words : Sagara oil field, SDP, hydrocarbons, free gas, in situ fluid, carbon isotope, thermogenic origin, microbial origin

2. Geochemical characteristics of Tertiary Sagara oil from an active forearc basin, Shizuoka, Japan

Svetlana Yessalina, Noriyuki Suzuki and Hiroyuki Saito

活動的な前弧堆積盆に産する静岡県第三紀相良石油の地球化学的特徴

Svetlana Yessalina, 鈴木徳行，斉藤裕之

相良油田は掛川堆積盆中にあり，太平洋側の前弧堆積盆にある油田として数少ないものの一つである．掛川堆積盆には石油生成能力の低い堆積岩類が多く，相良石油の起源はいまだ明らかにされていない．石油炭化水素組成は，相良石油がわずかに微生物分解作用を受けていること，移動にともなう汚染や化合物の分別作用を受けていることを示している．芳香族炭化水素組成から見積もられる有機熟成度はビトリナイト反射率にして0.9－1.2%程度あり，高い熟成度にある．顕著な高等植物起源バイオマーカー，高いPr/Ph比，乏しい有機硫黄化合物によって特徴づけられており，相良石油は沿岸成，デルタ成，河川成の砕屑性堆積岩に由来していることが示唆される．掛川堆積盆の大深度において陸源有機物に富む石油根源岩から生成した石油が，活動的な前弧堆積盆で形成された多くの断裂や断層を通じて地表付近に達し相良油田を形成したものと考えられる．

Key words : biomarker, forearc basin, higher plants, Sagara oil

3. Geochemical characteristics of crude oils from the Sagara oil field, Shizuoka Prefecture, Japan

Susumu Kato, Amane Waseda and Hideki Nishita

静岡県相良原油の地球化学的特徴

加藤　進・早稲田　周・西田英毅

相良油田から採取した原油６試料について地球化学的分析を行い，新潟原油と比較することによってその特徴を明らかにし，根源岩や原油の移動プロセスについて考察した．

相良原油の特徴として，１）低硫黄の軽質原油，２）環境指数が小さい，３）Ph/nC_{18}比が小さく，Pr/nC_{17}比やオレアナン/ホパン比が大きい，４）ステラン組成では相対的にC_{29}が多く，C_{28}が少ない，５）炭素同位体組成が軽い，が挙げられる．相良原油の根源岩は主に海成有機物からなるが，新潟原油の根源岩よりも陸源有機物に富み，より酸化的な環境で堆積したと推定される．炭素同位体組成やC_{28}ステランの相対量は根源岩の年代が古第三紀であることを示唆している．堆積盆の深部で生成された原油が断層に沿って上方に移動し，集積したと推測される．

Key words : Sagara oil field, Niigata oils, light hydrocarbons, Pr/nC_{17} ratio, Pr/nC_{18} ratio, oleanane/hopane ratio, carbon isotope compositions

4. Lithological and physical properties for core samples from the Sagara oil field-Oil occurrence in Sagara core sample-

Satoshi Hirano, Yoshiaki Araki, Koji Kameo, Hiroshi Kitazato and Hideki Wada

相良油田より掘削されたコア試料の岩相および物性と石油の産状

平野　聡，荒木吉章，亀尾浩司，北里　洋，和田秀樹

静岡県榛原郡相良町にて地表から200.60 m深の学術掘削を行ない，岩石試料の記載，物性測定の後，試料中の石油の産状と比較した．本掘削地域においては，空気浸透率が10^{-11} m^2以上の場合，流体の通路または貯留岩層としてのポテンシャルがあることが明らかになった．得られたコア試料は，中新世後期の相良層群に属する泥岩，砂岩，礫岩である．空気浸透率は，岩相を問わず主に炭酸塩セメントの有無に直接的に反映されている．炭酸塩セメントが発達する岩相では空気浸透率が低く，石油とは共存しない．したがって，このような炭酸塩セメントの発達過程は，石油の移動や貯留岩層の形成に大きな影響を与えるということが言える．

Key words : carbonate cement, porosity, permeability, stable isotope, forearc sediments, Sagara Drilling Program（SDP）

5. Culture-dependent and independent analyses of subsurface microbial communities in oil-bearing strata of the Sagara oil reservoir

Takuro Nunoura, Hanako Oida, Noriaki Masui, Fumio Inagaki, Ken Takai, Satoshi Hirano, Kenneth H. Nealson, and Koki Horikoshi

相良油田地下生命圏の微生物生態解析

布浦拓郎・笈田花子・益井宣明・稲垣史生・高井　研・平野　聡・Kenneth H. Nealson・掘越弘毅

相良油田掘削により採取した（最大深度200m）コア試料を用い，石油含有層及び非含有層の微生物群集を培養法及び非培養法により解析し，比較検討した．細菌数は石油を含む層で特異的に増大し，また，16S rRNA遺伝子クローン解析からは，石油含有層序ではPseudomanas stutzeriが圧倒的に優占することが示唆された．一方，培養可能な微生物群集を評価でも，16S rRNA遺伝子クローン解析の結果と同様，石油含有層では石油分解を行うPseudomanas stutzeriの優占が示された．今回の研究により，相良油田では石油含有層序には特定の石油分解菌が濃集していることが明らかになった．

Key words : subsurface microbial community, Sagara oil reservoir, Pseudomonas, petroleum

6. MIS11-19 pollen stratigraphy from the 250m Choshi core , NE Boso Peninsula, central Japan: Implications for the early/mid-Brunhes（400-780ka）climate signals

Masaaki Okuda, Hiroomi Nakazato, Norio Miyoshi, Takeshi Nakagawa, Hiroko Okazaki, Saneatsu Saito and Asahiko Taira

房総半島250m銚子コア等に基づく更新世中期の花粉層序とその古気候学的意義

奥田昌明・中里裕臣・三好教夫・中川　毅・岡崎浩子・斎藤実篤・平　朝彦

房総半島北東域の浅海成層（犬吠層群）から得られた250m銚子コアのMIS11-19部分に対して花粉分析および関連考察を行うことにより，更新世中期における花粉ベースの氷期間氷期指標を認定ならびに花粉層序の構築を行った．銚子コアに対する花粉と酸素同位体のマルチ分析の結果は，スギ属等の温帯性針葉樹とトウヒ属等の北方性針葉樹の交代がδ^{18}O曲線と万年オーダーで相関し，また指標テフラを介して外洋のSPECMAP等スタックとも合致することを示した．またこれら花粉群と気温の関係を現生の表層花粉データを用いて確認した結果，上記の温帯性/北方性針葉樹比が更新世中期における氷期間氷期サイクルの指標になり得ることが示された．さらに同様の花粉比計算を琵琶湖のMIS1-11花粉層序（Miyoshi et al. 1999）に適用した結果，この変化は日本列島中軸部におおむね共通することが認められ，過去80万年間を通じての広域花粉層序が得られている．

Key words : Boso Peninsula, Inubo Group, Middle Pleistocene, palynology, temperate/boreal conifer ratio, Cryptomeria/Picea ratio, paleoclimake, Ksll

7. Effect of depositional processes on the origin and composition of organic matter, examples from the Pleistocene sediments in the Choshi Core, Boso Peninsula

Akiko Omura, Koichi Hoyanagi and Satoko Ishikawa

有機物組成とその起源に及ぼす堆積作用の影響：房総半島の更新統銚子コアの例

大村亜希子，保柳康一，石川仁子

千葉県銚子地域に掘削された更新統のコア試料（銚子コア）を対象として堆積環境変化と有機物の堆積作用との関連を検討した．銚子コアは，岩相・生痕化石相と堆積環境指標である有機物組成の三角ダイヤグラム上での分布領域・形態のはっきりした陸源有機物の増加にもとづき，上方浅海化する陸棚堆積物で構成されていると解釈された．C/N比・堆積有機物の安定炭素同位体比測定と堆積有機物の顕微鏡観察の結果，これらの堆積物に保存されている有機物には海洋プランクトン起源と陸上植物起源の両者が含まれ，海洋起源有機物の大部分が形態的特徴のないアモルファス有機物であることがわかった．約50万年前以前は，陸源有機物の増加に伴って有機炭素濃度は増加するが，これ以降は浅海化に伴う陸源砕屑物の流入による希釈と酸化効果が働いたと考えられ，有機炭素濃度は減少傾向を示す．

Key words : kerogen composition, σ^{13}C value, sedimentary environments, Pleistocene, Choshi core, basin margin, Boso peninsula

8. Age model, physical properties and paleoceanographic implications of the upper Quaternary core sediments in the Choshi area, central Japan

Koji Kameo, Makoto Okada, Moamen El-Masry, Toshio Hisamitsu, Saneatsu Saito, Hiroomi Nakazato, Naohiko Okouchi, Minoru Ikehara, Hisato Yasuda, Hiroshi Kitazato and Asahiko Taira

銚子地域で掘削された中部更新統コアの年代モデルと物性データおよびその古海洋学的重要性

亀尾浩司，岡田　誠，Moamen El-Masry，久光敏夫，斎藤実篤，中里弘臣，大河内直彦，池原　実，安田尚人，北里　洋，平　朝彦

北西太平洋における中期更新世の海洋環境の変遷を明らかにするために，1998年に千葉県銚子市北西部において陸上ボーリングが行われ，全長250mの連続した更新統コアが得られた．本研究では，そのコアの岩相層序を明らかにした上で，石灰質ナンノ化石と古地磁気の検討を行い，コア中に88万年前から46万年前までの４つの基準面を見いだした．このことに基づくと，このコアの酸素同位体比曲線は同位体比ステージ24から11までに相当することが明らかになり，同層準の年代モデルを確立できる．さらに，MSCLによる堆積物物性の検討結果は，帯磁率と堆積物密度の変動が氷期・間氷期サイクルと連動しており，その変化が黒潮フロントの動きと同調していることを示している．

Key words : Choshi area, Northwestern Pacific, late Pleistocene, age model, physical property, oxygen isotope record, calcareous nannofossils, magnetostratigraphy

通常論文

1. Zircon U-Pb ages from tuff beds of the upper Mesozoic Tetori Group in the Shokawa district, Gifu Prefecture, central Japan

Nao Kusuhashi, Ai Matsumoto, Masaki Murakami, Takahiro Tagami, Takafumi Hirata, Tsuyoshi Iizuka, Takeshi Handa, and Hiroshige Matsuoka

岐阜県荘川地域に分布する手取層群（中生界上部）の凝灰岩層のジ

ルコン・ウラン鉛年代

楠橋　直・松本　藍・村上雅紀・田上高広・平田岳史・飯塚　毅・半田 岳士・松岡廣繁

中部日本に分布する中生界上部手取層群は，植物化石や海生・非海生動物化石を多産し，とくに哺乳類や恐竜を含む多様な脊椎動物化石の産出層としてよく知られている．手取層群は中期ジュラ紀から前期白亜紀における東アジアの生物相を理解するうえで重要な地層である．しかしながら，手取層群の堆積年代についてはいまだによくわかっておらず，そのため他地域との正確な対比は非常に難しい．手取層群の累層の信頼できる年代決定の第一歩として，岐阜県高山市荘川地域（旧大野郡荘川村）に分布する手取層群より凝灰岩試料を採取し，それらに含まれるジルコン粒子を用いてレーザーアブレーション誘導結合プラズマ質量分析計（laser ablation inductively coupled plasma mass spectrometry: LA-ICPMS）によるウラン鉛年代測定をおこなった．牛丸層，御手洗層，大黒谷層から得られた最も若く信頼性の高いウラン鉛年代はそれぞれ，130.2±1.7 Ma，129.8±1.0 Ma，117.5±0.7 Ma（誤差はすべて 2 SE）であった．荘川地域に分布する手取層群は，上部ジュラ系から下部白亜系であると考えられていた．しかし，本研究の結果により，同地域の手取層群は九頭竜亜層群から赤岩亜層群まですべてが下部白亜系であることが明らかになった．牛丸層，御手洗層，大黒谷層は，Hauterivian階の上部からBarremian階，Hauterivian階の上部からBarremian階，Barremian階からAptian階にそれぞれ対比される．

Key words : U-Pb geochronology, LA-ICPMS, zircon, Tetori Group, Gretaceous, Gifu Prefecture, Shokawa, central Japan

ジオロジストのための

法律メモ

著作権譲渡等同意書の解説（18）

弁護士　高木宏行

学校等の授業や講義で地質学の論文を教材に用いることがあると思います．その場合，教室にくる生徒の人数分コピー（複製）を作ることになります．コピーする論文の著作権が自分に帰属していれば，自由に複製することができますが，日本地質学会の場合，論文を学会誌で発表している場合には，著作権譲渡等同意書によって，著作権は学会に移転しています（その場合でも著作者人格権は，論文作成者の元に残っています．）ので，学校の授業で用いるためにコピー（複製）する場合であっても，本来的には，著作権者である日本地質学会の許諾を得てからしなければならないことになります．もちろん，他人の論文や著書をコピー（複製）する場合も著作権者の許諾を得なければコピーすることができないのが原則です．

しかし，この結論をそのまま教育の場でも適用すると，煩雑ですし，十分な教育ができなくなってしまうおそれがありますので，一定程度，教育の場において著作物を円滑に利用できるようにする必要があります．そこで，著作権法35条１項は，教育を担任する者が，その授業で使用するために必要と認められる限度で，公表された著作物を複製することができる，として次のように定めています．

「（学校その他の教育機関における複製等）第35条学校その他の教育機関（営利を目的として設置されているものを除く．）において教育を担任する者及び授業を受ける者は，その授業の過程における使用に供することを目的とする場合には，必要と認められる限度において，公表された著作物を複製することができる．ただし，当該著作物の種類及び用途並びにその複製の部数及び態様に照らし著作権者の利益を不当に害することとなる場合は，この限りでない．」

学校その他の教育機関については，小・中・高・大学・高等専門学校，専修学校などが含まれます．また，公民館，青年の家などの社会教育施設，教育センターなどの教員研修施設，職業訓練施設なども含まれますが，営利目的のものは除かれます．営利を目的とする教育機関としては，私人の経営する学習塾や予備校，会社等が出資する研修機関がこれに該当します．営利を目的とする教育機関においてコピー（複製）する場合には，原則どおり，著作権者の許諾を得て複製しなければなりません．

つぎに「授業の過程」とは，初等・中等教育機関の場合，いわゆる授業だけでなく，特別教育活動である運動会等の学校行事も含まれます．また大学の場合は，講義をはじめ，実験・実習・体育実技・ゼミ等も含まれます．

条文からは，講義をする先生だけでなく，授業を受ける者も複製をすることができることがわかります．

もっとも，条文だけからは，具体的な場面で判断に困ることもあります．そこで文化審議会著作権分科会法制問題小委員会を受け，平成14年１月から同年９月まで，権利者，利用者双方によって「著作物の教育目的の利用に関する検討」の場が設けられ協議が行われ，「学校その他の教育機関における著作物の複製に関する著作権法第35条ガイドライン」として公表されています．

以上に対し，日本地質学会では，著作権法35条やガイドラインでは不十分な所等がありますので，日本地質学会著作物利用規定において，独自の定めをしています．自ら作成し，著作権を学会に譲渡した論文については「作成者が自ら行う授業，講義，講演，研究発表のため受講者に交付する目的で複製する場合（複製部数を問わない．），プロジェクター等により上映するために複製する場合，及びプロジェクター等により上映する場合」（第６条１項３号）に自由に複製できることを確認しつつ，必要最小限の要件を複製部数について緩和しています．したがって，自ら作成した論文については，必要箇所だけでなく，50名を超える大教室での講義のために人数分をコピーすること（ガイドラインではこれを不当利用に位置づけていますが，疑問です．），論文全体をコピーすること，あるいは生徒の人数を超えたコピーを作成することもできます．

もちろん，地質学の論文であっても他人が作成した論文をコピーする場合には，原則に戻り，学会の許諾を必要とします．その際，許諾を求めるための要件が日本地質学会著作物利用規定７条及び８条に定められています．

地質学以外の著作物をコピーする場合には，著作権法35条に従って行わなければなりません．

弁護士　高木宏行
（キーストーン法律事務所）
日本地質学会顧問

第二東京弁護士会所属
現在　東京弁護士会・第二東京弁護士会合同図書館嘱託，（財）日弁連交通事故相談センター東京支部　嘱託

TOPIC

活断層データベース大幅改訂（http://www.aist.go.jp/RIODB/activefault/）

産業技術総合研究所活断層研究センター　伏島祐一郎

新しい検索結果表示画面．絞り込み検索ボックス，並べ替えボックス，活断層平面図を追加しデザインを一新しました．

独立行政法人産業技術総合研究所活断層研究センターは，2006年８月24日に，活断層データベースを大幅に改訂しました．見かけが大きく変わり，新しいデータを大量に追加しましたが，旧版のデータも引き続き検索することができます．無料でいつでもお使いいただけますので，ぜひお試しください．これまでと同じ URLからアクセスしてください．
http://www.aist.go.jp/RIODB/activefault/

主な改訂内容を，以下に列記します：
(1) 検索できる活動セグメントを大幅に増やしました．
(2) 絞り込み検索できるようになりました．
(3) 検索結果を並べ替えできるようになりました．
(4) 検索できるデータ項目を増やしました．
(5) 検索結果を示す表を組み替え，増やしました．
(6) 検索経路を追加しました．
(7) 画面デザインを変更しました．
(8) ユーザビリティー（使い易さ）を高めました．
(9) アクセシビリティー（接し易さ）を高めました．

純粋なリレーショナルデータベースとして，新しい形式に再構築した事により，これらの機能強化が実現しました．しかしこれらは，主に新しい形式で追加入力したデータを対象としています．新しい形式へのデータ更新入力を，順次進めていく予定です．

CALENDAR

2006.10〜

地球科学分野に関する研究会，学会，国際会議，などの開催日，会合名，開催学会，開催場所をご案内致します．会員の皆様の情報をお待ちしています．
☆印は，日本地質学会行事．

10月　October

○堆積学スクールOTB2006「水理学の基礎と波浪堆積構造」
10月７日（土）13時〜９日（月）13時まで
場所：学校法人大阪工大摂南大学セミナーハウス白浜海の家
http://www.sediment.jp/04nennkai/2006/school.html

○日本物理探査学会第115回学術講演会
10月16日(月)〜18日(水)
会場　KKRホテル博多（福岡市中央区薬院）
http://www.segj.org/

○日本測地学会第106回講演会のお知らせ
10月18日（水）〜10月20日（金）
会場：奥州市文化会館（愛称Ｚホール）中ホール（岩手県奥州市）
世話人　国立天文台水沢VERA観測所　田村
tamura@miz.nao.ac.jp/Tel. 0197-22-7131
http://wwwsoc.nii.ac.jp/geod-soc/

○日本火山学会秋季大会
10月23日〜25日
場所：阿蘇・いこいの村
http://hakone.eri.u-tokyo.ac.jp/kazan/VSJ1E.html

○日本地下水学会2006年秋季講演会
10月26日（木）〜28日（土）
会場：岡山県倉敷市芸文館
http://www.groundwater.jp/jagh/

○日本地震学会2006年度秋季大会
10月31〜11月２日
場所：名古屋市
http://wwwsoc.nii.ac.jp/ssj/index.html

11月　November

○第７回こどものためのジオ・カーニバル
11月11日（土）・12日（日）
場所：大阪市立科学館
http://geolo.sci.osaka-cu.ac.jp/geo/2006geo.html

○日本応用地質学会　平成18年度研究発表会
11月９日（木）〜10日（金）
会場：熊本テルサ（熊本市水前寺公園）
http://wwwsoc.nii.ac.jp/jseg/

○第２回国際シンポジウム“東および南アジアの地質学的解剖”（IGCP 516）
11月14日（火）〜19日（日）
場所：フィリピン・ケソン市PASAGAサイエンスガーデン
http://staff.aist.go.jp/hara-hide/igcp516

○第51回地盤工学シンポジウム
11月16日（木）〜17日（金）
場所　東京
http://www.jiban.or.jp/top.html

○平成18年日本地熱学会天栄大会
11月20日（月）〜11月22日（水）
場所　福島県岩瀬郡天栄村　羽鳥湖高原交流促進センター
http://wwwsoc.nii.ac.jp/grsj/index.html

12月　December

○第16回環境地質シンポジウム
12月８日（金）・９日（土）
場所：日本大学文理学部　百周年記念館　国際会議場
http://www.jspmug.org/

○2006年度日本情報地質学会シンポジウム
「Web-GISによる公開情報活用とその促進環境の新展開」
12月15日（金）９：30−17：00
場所：秋葉原ダイビル５階　５Ｂ会議室
http://www.jsgi.org/

委員会だより

☆行事委員会

第２回行事委員会報告

2006年７月８日（土）　於地質学会事務局

出席者：久田委員長・近藤（高知大実行委）・吉村（岩石）・斎藤眞（地域地質）・岡田誠（層序）・石川（構造地質）・斎木（古生物）・大久保（石油）・田村（環境地質），七山（堆積・海洋等）・須藤（応用地質・代理），古川（火山），浅野（地学教育），坂本（情報地質）

・講演数の確認を行った（558件）．
・広報（マスコミ対応）：行事委員会内の担当は久田委員長．理事会広報担当は大友理事．実行委員会の担当は後日決定．
・シンポジウムの日程を決定した．
・定番セッションの日程を決定した．
・優秀講演賞（ポスター賞）の選考委員を決定した．
・緊急展示の担当は上野委員に決定した．
・第３回行事委員会（７月15日産総研），第４回同委員会（９月18日16時から）の日程を確認した．

（記録　古川）

第３回行事委員会報告

2006年７月15日（土）　於産総研第７事業所６F

出席者：久田委員長・斎藤眞（地域地質）・七山（堆積）・上野（応用地質），古川（火山）・片山（海洋）

・校閲結果とプログラム編成の確認を行った．その際，校閲結果の提出締切期日の表現に不手際が在ることが判明した．今後改めることにした．
・申し出のあったシンポジウム「南海トラフ」の期日変更は，今回は特例として認めることになった．

（記録　古川）

院生コーナー

The Second International Palaeontological Congress 参加報告

千葉大学大学院自然科学研究科博士後期課程１年
浦本豪一郎

はじめに

2006年６月17日から21日の５日間，中国北京の北京大学でThe Second International Palaeontological Congress（第二回国際古生物会議：2nd IPC）が開催された．IPCはInternational Palaeontological Association（国際古生物学協会）を主催として４年に一度開かれる国際会議である．今回のIPCは，参加国は約50ヶ国，参加者は約900人で，日本人も比較的多く45人くらいの参加者がいた．2002年にシドニーで開かれた第一回IPCでは日本人学生の参加者が３人だったと聞いていたが，今回のIPCには10人ほどの学生が参加していた．

筆者は参加しなかったが，本会議の前後と中日（19日）に巡検があった．巡検は近年の研究で注目されている中国各地の露頭やセクションを対象に行われた．また18日の夜にはCongress Banquetが開かれ，参加者からは非常に盛大なバンケットだったという感想を聞いた．

写真１　北京大学の南門．

本会議

今回のIPCは古生物学の会議としては中国では初めての国際会議で，初日（17日）午前のOpening Ceremonyには多くの要人が参加し，警備が厳重で物々しい雰囲気だった．

発表は基本的に８：00から18：00までで，Special session ６件，General session 14件，Topical session 26件がThe Yingjie Conference CenterとEarth Sciences Buildingで行われた．一部のセッションでは口頭発表の会場が狭く，人が入りきらないために急遽会場が変更になるなどの混乱が多少あったようである．発表全体としては，中国に関係する内容の発表が多かったように思う．驚異的な経済発展が進んでいる中国にあって，地質学分野における中国研究の進展は十分に予想される．中国関係の話をたくさん聞けたことは中国の地質を勉強する上で良い機会だったといえるだろう．

さて，筆者の発表だが，筆者はGeneral sessionの中のG11‘High resolution biostratigraphy’というセッションで，

・Global δ^{13}C fluctuations during the mid-Cenomanian event;

写真２　The Yingjie Conference Center入口．幕には「熱烈歓迎参加第二回国際古生物学大会的各国代表」と中国語で書かれている．

院生コーナー

写真3　IPC会場近くの掲示板．写真に写っている範囲の掲示板は全てIPCや地質・古生物関連のポスターが貼られていた．

写真4　今回のIPC開催に尽力されたSha Jingeng教授（南京地質古生物研究所所長・中国古生物学会会長：前列右から3番目）主催のディナーにて．

implications of integrated stratigraphy for the Cretaceous Yezo Group, Hokkaido, Japan

・Integrated stratigraphy and interregional correlation of the Cretaceous Yezo Group, in the Shumarinai area, Hokkaido, Japan

というタイトルで2件のポスター発表を行った．ポスターは初日から最終日まで掲示しておくことができたが，ポスター会場がThe Yingjie Conference Center一階の最も奥の部屋で，コアタイムも無かったためか，ポスター会場は閑散としている場合が多く，ポスターを前にしての議論がなかなかできなかった．しかし，最終日（21日）は多くの人がポスター会場を訪れ，筆者も専門が異なる研究者の方々ではあったが，ポスターについて説明し，議論をすることができた．今回のIPCは筆者にとって初めての国際会議であり，また，一回の学会で2件の発表をすることも初めての体験だったので，中国に行く前は極度に緊張していた．しかし，専門外の方々に筆者の研究を理解して頂き，議論を楽しめたことは大きな自信となった．次に国際会議に参加する時は是非とも口頭発表に挑戦してみたいと思う．

議論してみて印象的だったのは，白亜紀中期の古環境変遷についてである．白亜紀中期は非常に温暖な時代だったというのが一般的な認識だが，寒冷化した時期もあったことが最近の研究で明らかにされ，これまでの共通認識が変わりつつある．しかしながら，白亜紀中期の古環境変遷像は欧米の白亜系の海成層からの情報がほとんどで，アジア地域からの情報は非常に限られている．中国を含むアジアの白亜系は大部分が陸成層であることから，「陸域からの情報」というこれまでの研究とは異なる視点からの情報発信が可能である．アジアの陸成層で研究を進めるには乗り越えなければならない問題がまだまだあるものの，今後の白亜紀研究においてアジアの白亜系が持っているポテンシャルの大きさを感じることができた．

おわりに

上述のように，今回のIPCは古生物学関連の会議としては中国で初めての国際会議だったということで，事前の手続きから本番の発表に至るまで様々な不備があったことは否めない．会場ではインターネットへの接続ができなかった．また，筆者の泊まったホテルはIPCの事務局を通して予約したホテルであるにもかかわらず，全く英語が通じなかったため，フロントとのやり取りには非常に苦労した．こうした点については改善の余地があると言えるだろう．ただ，苦労はあったものの，今までにない多くの経験をすることができ，今回のIPCを楽しめたと思う．これも多くの方々・機関の御理解と御協力があったからに他ならない．早稲田大学の平野弘道教授，南京地質古生物研究所のLi Gang助教授，早稲田大学古環境科学研究室の学生諸氏，特に化石部屋の岩崎正太郎氏には，北京滞在中，物心両面にわたって支えて頂いた．千葉大学堆積学研究グループの伊藤　慎教授，吉田修二助教授，そして学生諸氏には日頃の研究を支えて頂いている．また，日本古生物学会には今回のIPC参加にあたって旅費の一部を補助して頂いた．以上の方々および機関には厚く御礼申し上げます．

関連するwebサイト
http://ipa.geo.ku.edu（国際古生物学協会）

常時投稿をお待ちしています．院生コーナーの編集は現在以下の4名でおこなっています．原稿はe-mailでいただければ幸いです．

f04j003d@mail.cc.niigata-u.ac.jo　梅津慶太（新潟大）
tksmcdr@hiroshima-u.ac.jp　高島千鶴（広島大）
iba@eps.s.u-tokyo.ac.jp　伊庭靖弘（東京大）
s059702@matsu.shimane-u.ac.jp　河野重範（島根大）

訃　報

本会の次の方々が逝去されました．謹んで哀悼の意を表します．

名誉会員　市原　実（8月6日）
茅原一也（8月29日）

正会員　阿久津　純（5月4日）

院生（研究生）の方へ「院生割引申請」について

2007年度（2007.4～2008.3）院生割引会費の受付開始

2001年より会費の院生割引制度が設けられています．定収のない院生（研究生）については，本人の申請により院生割引会費が適用されます．つきましては，次年度（2007年度）の会費について申請受付を開始致しますので，該当される会員は下記の書式にて申請書を提出して下さい（郵送）．**会費請求書発行の都合もありますので，請求書発行前の受付〆切は11月22日（水）と致します．特に口座自動引落で会費を納入されている方は，この期日までに申請書をご提出下さい．なお，これまで（～2006年度）の会費についての申請受付は終了していますので，2007年度分の申請のみ適用となります．**

注意！！
毎年更新となりますので，今年度の割引を受けている方で，次年度も該当する方は改めて申請して下さい（来年３月まで院生（研究生）の方も申請すれば適用）．

送付先：〒101-0032　東京都千代田区岩本町2-8-15　井桁ビル6階
日本地質学会

2007年度日本地質学会会費院生割引申請書

（新規・継続）

日本地質学会　御中

私は，運営細則第12条第1項（1）に基づき，会費の院生割引を申請いたします．

年　　月　　日現在

会員番号：

会員氏名：

所属：　　大学　　研究科

専攻　　前期・後期　　年在学中

上記，本学の学生につき，定収のない院生（研究生）であることを証明いたします．

指導教官（等）

所属：

氏名：　　印

請求書発行前受付〆切
2006年11月22日（水）

（金融機関・郵便局用）　　平成　　年　　月　　日

預金口座振替依頼書
自動払込利用申込書（収加）

私は、SMBCファイナンスサービス株式会社から請求された金額を私名義の下記預金口座から預金口座振替によって支払うこととしたいので、預金口座振替規定を確約のうえ依頼します。

収納代行会社	SMBCファイナンスサービス株式会社 （旧株式会社三井ファイナンスサービス）	振替日	6日・23日（金融機関休業日の場合は翌営業日）

（フリガナ） 申込人名		申込人住所	〒 ☎

民間金融機関または郵便局のうちどちらか一つをご指定ください。

民間金融機関用 捨印

民間金融機関

金融機関コード		支店コード		預金種目（どちらかに○印）	口座番号（右詰めでご記入ください。）
銀行 信用金庫 組合		本店 支店 出張所		1. 普通 2. 当座	
（フリガナ） 口座名義人	法人の場合は、社名、代表者 役名、氏名を省略せずご記入ください。			金融機関お届け印	印

郵便局

（フリガナ） 口座名義人	法人の場合は、郵便局へお届けの社名、代表者 役名、氏名を省略せずご記入ください。	郵便局お届け印	印

種目コード	契約種別コード	通帳記号	通帳番号（右詰めでご記入ください。）
166	30	1　　0 の	

払込先口座番号	00110－5－58830	払込先加入者名	SMBCファイナンスサービス株式会社

ご注意！
金融機関へのお届け印ですか
お通帳でご確認ください

〈収納企業使用欄〉

収納企業名	日本地質学会	料金等の種類	会費等
契約者番号	委託者コード 18476000	顧客コード 00000	

－預金口座振替規定－　※郵便局払いは除く。

1. 銀行（金庫・組合）に請求書が送付されたときは、私に通知することなく、請求書記載金額を預金口座から引落しのうえ支払ってください。この場合、預金規定または当座勘定規定にかかわらず、預金通帳、同払戻請求書の提出または小切手の提出はしません。
2. 振替日において請求書記載金額が預金口座から払戻すことのできる金額（当座貸越を利用できる範囲内の金額を含む。）をこえるときは、私に通知することなく、請求書を返却してもさしつかえありません。
3. この契約を解約するときは、私から銀行（金庫・組合）に書面により届出ます。尚、この届出がないまま長期間にわたり会社から請求がない等相当の事由があるときは、特に申出をしない限り、銀行（金庫・組合）はこの契約が終了したものとして取扱ってさしつかえありません。
4. この預金口座振替についてかりに紛議が生じても、銀行（金庫・組合）の責めによる場合を除き、銀行（金庫・組合）には迷惑をかけません。

金融機関使用欄

（不備返却事由）
1. 預金（貯金）取引なし　3. 印鑑相違
2. 記載事項等相違
　店名、預金種目、口座番号、通帳記号、通帳番号、口座名義
4. その他（　　）

備考

検印	印鑑照合	受付印	

取扱局　日付　印

（民間金融機関・郵便局へのお願い）
この預金口座振替依頼書・自動払込利用申込書に不備がありましたら、不備返却事由欄の該当項目に○印をつけて速やかに右記不備返却先へご返送ください。

（不備返却先）
SMBCファイナンスサービス㈱　〒160-8440
東京都新宿区新宿 2-16-6　☎03-5362-2856

◎書類の流れ　お客様→収納企業→SMBCファイナンスサービス→金融機関

裏面のりしろ①

キリトリ線

80円
切手
貼付

101-0032

東京都千代田区岩本町
二丁目八―一五　井桁ビル内

日本地質学会

御中

オリ線

住所

氏名

オリ線

裏面のりしろ③

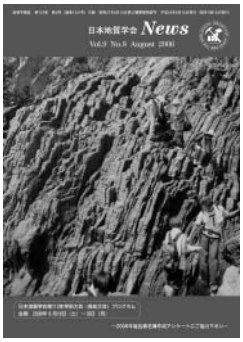
キリトリ線

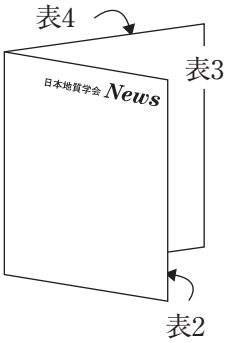
裏面のりしろ②

広告募集

News誌に広告を掲載しませんか.

News誌の掲載広告を募集しています．学会の直接取り扱いになりますので，カラー印刷・掲載サイズなどご相談に応じます．ぜひご利用ください．





＜広告掲載価格表＞

	価格（モノクロ）	版下作成	カラー
表 4	60,000	＋10,000	＋10,000
表 2	50,000	＋10,000	－
表 3	40,000	＋10,000	－
普通	35,000	＋5,000	－

（単位：円）

申込・問い合わせ：日本地質学会事務局
電話　03-5823-1150　FAX　03-5823-1156
e-mail ; main@geosociety.jp

研究室のミニ工場

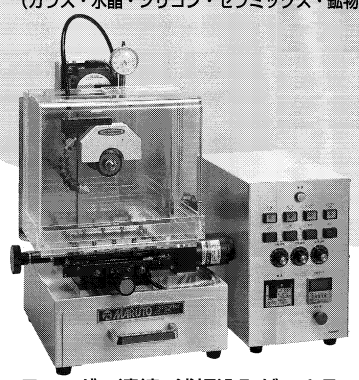
マルトーのラボ・ファクトリープラン3点セット

小型　精密　操作簡単　低価格

（ガラス・水晶・シリコン・セラミックス・鉱物・金属材料などの加工）

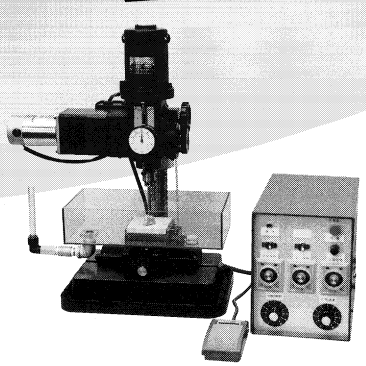
小さな機械だが役に立つ

磨く　切る　抜く



カッティング　連続・浅切込みができる
ステップカッター〔MC-170〕
●試料へのダメージが少ない
●最小切込み量 10μm／pass
●最大加工能力 H25×L40mm
●設置面積 W550×L450mm
●本体価格 178万円～

ポリッシング　精密鏡面研磨機
ドクターラップ〔ML-180〕
●組織検査用試料のラッピング・ポリシング
●アクセサリー豊富
●研磨試料サイズ φ1～φ100mm
●設置面積 W400×L400mm
●本体価格 45万円～



コアリング　微小径コア抜き取り機
ミニピッカー〔MG-5N〕
●主軸回転数 4000～12000r／min
●加工能力 φ1～φ6mm×30mm
●設置面積 W600×L400mm
●本体価格 125万円～

材料を切る・削る・磨くそして測る技術で奉仕する

http://www.maruto.com

株式会社マルトー
本社／〒113-0034 東京都文京区湯島1-1-10 ☎東京(03)3251-0727(代表) FAX:東京(03)3251-2478
福岡連絡事務所／〒815-0033 福岡市南区大橋1-21-5 岩田ビル ☎福岡(092)512-2755 FAX:福岡(092)561-4288

安全と安心を支えて半世紀

OYO最前線

第33回ＯＹＯ展

- 10月25日・26日
- ＪＡビル（東京・大手町）
- 展示会とセミナー
- 入場無料

詳しいご案内はHPから　http://www.oyo.co.jp/

応用地質株式会社

本　社　〒102-0073　東京都千代田区九段北4-2-6　TEL.03-3234-0811　FAX.03-3263-6854
URL　http：//www.oyo.co.jp/　　E-mail　prosight@oyonet.oyo.co.jp

©日本地質学会　〒101-0032　東京都千代田区岩本町2-8-15　井桁ビル6F　電話03-5823-1150
Fax 03-5823-1156　E-mail：main@geosociety.jp　ホームページ http://www.geosociety.jp